

Cycle Relay Column

# 自転車で明日を迎えに行こう

自転車の明るい未来を切り開こうと、さまざまな分野で活動している方々が月替わりで登場するリレーコラム。第8回は、仕事の傍ら、自転車の運転技術や交通ルールを教える教室を運営する片山昇さんに、文化としての自転車の発展と、交通教育の大切さを語っていただく。



第8回  
片山 昇さん

交通教育コンサルタント・NPO尾張旭・セーフティ・サイクリスト・ネットワーク (OSCN) 代表。大学時代には、東日本学生サイクリング連盟の理事としてランドナーイベントなどを運営。世界を転戦した元二輪オフロードレースプロレーサーでもある。

私は、小学校3年生の頃から未知の世界への冒険に憧れたサイクリストでした。昭和40年代、兄より譲り受けた子ども車と友達と荒川沿いを走りはじめ、中学生になると、ランドナーで東京・練馬の実家から秩父周辺の間々を100kmほど走るようになり、自転車と共に未知なる土地のいくつかの険しい峠を越えることに満足感を抱き、自分が生きていくという実感や頑張ったという自信のようなものを胸に、夜半、家へと帰還する日々。たくさんの人との出会い、様々なことを自転車から学ぶことができました。

30年以上の歳月が流れ、近年、エコロジーでフィットネス効果の高い自転車利用者が急増傾向にあります。一方、私の住む愛知県尾張旭市でも、大人や子どももの自転車の危険走行・無灯火、ながら運転、並走、反対車線走行などが目立つようになっています。現状、学校や社会教育の場で、自転車を実際に利用しての安全利用啓発機会は残念ながら十分とはいえない状況があります。私自身9年程小学校現場で教員を経験し思うのですが、学校現場で実施しなくては、現在のカリキュラム上、その時間的余裕やノウハウがありません。40年前は日本各地に交通公園があり、学校でも自転車を用いた交通教育の場が存在していた時もあり



紙芝居で子どもたちに自転車の知識を伝える(左が本人)

ましたが、現在は消えていきつつあります。子どもと大人が共に学ぶ「じてんしゃスクール」そこで一昨年、ロングライドやヒルクライムなどに出場したり、日帰りサイクリングを楽しんだりしている私たちが交通教育の場をつくらうと、「OSCNじてんしゃスクール」の活動を始めました。自分たちの大好きな自転車が、文化として社会で認められ、素敵な乗り物として位置づけられてほしいという思いからでした。

## 交通教育で“自転車文化”の土台をつくる

ことを活動方針としました。地域の人々を中心に、行政・警察・民間企業、そして、全国各地で自転車の安全利用教室を展開するウィーラーズクルージュバンの指導、協力の下に、スクールは実現しました。バランス感覚を養う自転車の操縦技術向上トレーニング(ストラローム・一本橋・シーソー交通安全サーキット)など、自転車の交通ルール等の基礎知識の紙芝居、車や歩行者からみた場合の視点や感覚の違いなどを、参加者の方に実際に体験してもらいます。この学びから、参加者の大人や子どもは、それぞれの特性の違いや優れている点を身近で観察できます。お互いが自転車を操縦訓練する様子を見あうことで、各人の視点の違いや行動特性の違いに気づくこともできます。



親子で一緒に交通ルールや運転技術を学ぶ

活動開始から約2年、受講者数は累計で約700名に上りました。様々な職種ボランティアスタッフの方々と自転車教育についてのアイデアを出し合い試行する中で、新

たな人々が交通教育に関心をもち、家庭の場で語り合うきっかけとなってきています。最近では、地域の小学校のPTAから、スクールの開催して欲しいと要望を頂くことも多くなりました。人・自転車・バイク・車が、安全で快適に道路を共有していく交通文化の土台づくりとしての効果を実感し、様々な方々と協働していく意義を感じています。

### 自転車を持続可能な社会に

自転車は、環境問題を軽減し、来たるべきエネルギー改革社会で、持続可能な社会環境構築の一助となる乗り物と言えます。自転車を視野に入れた道路改革も叫ばれていますが、自転車に関する交通の法的整備は始まったばかりです。このような状況の中、私が将来を見据え最も大切だと思えるのは、学校や社会、家庭での交通教育なのではないかと思っています。

私は大学時代、卒業論文で欧州の交通教育を調査しました。それが現在の活動の原点となっています。研究対象だった旧西ドイツでは、専門機関が高校で交通教育を実施。将来母親になる女子生徒にはとくに重点的に教える機会を設けていました。その他、自転車を早くから交通の主軸としたオランダやベルギー等の交通教育先進諸国でも、自転車に関する一貫性ある交通教育や機関があります。今後、日本もこのような交通教育内容の充実が必要だと思っています。

私は、「じてんしゃスクール」での教育実践を通じて、今後も地域社会の中で、率先して交通教育の必要性を提案していこうと考えています。